

大阪学院大学
外国語論集

第72号

suddenly考 (1)	……………	黒宮公彦	1
研究ノート			
暗号電報誤読の悲劇 — 日米開戦前夜 —	……………	多賀敏行	19
書評			
『松原正全集 第三巻 戦争は無くならない』	……………	平松良康	31

平成 28 年 12 月

大阪学院大学外国語学会

大阪学院大学
外国語論集
第72号

平成 28 年 12 月

大阪学院大学外国語学会

suddenly 考 (1)

黒 宮 公 彦

1

英語の **suddenly** が「突然に」という意味を表す副詞であることは初学者でも知っていることであり、今さらとりたてて問題にすべきことなど何もないように思われる。ところがそのように理解していると次のような文を目にして驚くことになる。

- (1) a. Ann was suddenly hungry[.] (SGT, p.405)
b. Suddenly, he no longer fits in our cave. (SYH, p.144)

日本語の感覚で捉えると (1a) は「突然お腹がすいた」ということになり、奇妙に感じる。これは (1b) も同様である¹。

その一方で、このような例はそれほど珍しいものではないように思われる。こうした文に対する違和感が本研究の出発点である。

2

(1) のような文に違和感を覚える原因の一端は、動詞 (句) が状態を表していることにありと考えられる。Vendler (1967) は動詞 (句) が表す事態を、事態と時間との関係という視点から、「状態 (state)」、「活動 (activity)」、「達成 (accomplishment)」、「到達 (achievement)」の4つに分類した。この観点から (1) を眺めると、(1a) の述部 (predicate) は < be + 形容詞 > であり、状

態を表しているといえる。また (1b) の “(no longer) fits” も「(成長して大きくなったため) 体がもうほら穴には合わない状態である」ことを表している。他方 *suddenly* は突然の状態変化を含意するのであるから、最も典型的には Vendler (1967) が「到達」² に分類した動詞群と共起する傾向があると予想される。ところが (1) では動詞が状態を表しているにも関わらず *suddenly* と共起しており、突然の状態変化、すなわち到達を含意する *suddenly* と一見すると噛み合わないため、私たちは違和感を覚えるのではないだろうか。

ここで思い出されるのは Comrie (1976:19) の次の一節である。

(2) In many languages that have a distinction between perfective and imperfective forms, the perfective forms of some verbs, in particular of some stative verbs, can in fact be used to indicate the beginning of a situation (ingressive meaning).

つまり、動詞の完結相³ と非完結相とが形態上区別される言語においては、一部の動詞、とりわけ状態動詞の完結形が起動相を示すことがあるというのである。続けて Comrie (1976) は英語もこうした言語に該当すると述べる。

(3) [C]ompare also English *and suddenly he knew/understood what was happening*, where the meaning is also ingressive. (Comrie 1976:20)

(3)の例文中に *suddenly* が用いられているのは興味深いことだ。*suddenly* は突然何かが起こったことを表すのだから、たとえ文中に用いられている動詞が状態動詞であったとしても、状態変化が生じたことが含意されるわけである。逆に言うと状態動詞の完結形が実際には起動相を表していることを明示する手段として *suddenly* が使えるということだ。状態動詞の完結形が起動相を示す場合、それが完結相を表している（例えば過去のある一時期にある状態が継続し

ていたが、現在はその状態にないこと) ではないことを明確に伝えたい場合には何らかの手段を用いるのが望ましいと予想される。ましてや(3)のような、完結形が起動相を表すことがあることを具体的に示すために用いられている例文にあってはなおさらのことだ。このように起動相であることを明示したい場合に **suddenly** は有用だと考えられる。以上をまとめると、ある文に状態動詞と **suddenly** とが用いられていたなら、それは状態を表すのではなく、(少なくともしばらくの間継続する) 状態への変化を表すということである。

しかしこれで(1)に対する疑問は何も解消されない。なぜなら(1)の例文で問題なのは「それを『状態』ではなく『突然の状態変化』だと解釈すべきこと」なのではなく「そのような状態変化が果たして突然起き得るものなのか」という疑問だからである。すでに述べたように日本語で考えると「突然お腹がすいた」というのは奇妙だ。そして実際問題としても「お腹がすいていない状態」から「すいている状態」への変化が突然生じるとは考えにくい。

ところが日本語で考えても「突然眠くなった」という文であれば、少なくとも筆者は違和感を覚えない。だからと言って現実に「眠くない状態」から「眠い状態」への変化が突然生じるものかということ、それもまた考えにくい。するとこれは結局ことばの問題なのであって、日本語の場合「突然」という副詞は「なる」等の起動相を明示する動詞とともに用いなければならないということなのかもしれない。いくつか例文を見てみよう。

- (4) a. *突然お腹がすいた。
b. 突然空腹を覚えた。
c. 突然眠くなった。
d. ?? 突然疲れた。
e. 突然疲れを覚えた。
f. 突然疲れが出た。

ここから、日本語の「突然」はどうやら起動相を明確に示す動詞とともに用いられるものであるらしいことが見て取れる。それは逆にいうと、この制約さえ守っていれば、実際に「眠くない状態」から「眠い状態」への変化が突然生じることなどあり得るのかについては考えなくてもいいということなのかもしれない。他方(1)の例が暗示するように英語ではそのような制約すらないようだ。**suddenly** さえ使われていればそれが突然の状態変化を示し、そのような状態変化が現実突然起こり得るのかについては英語でも考えなくてもいい、ということなのかもしれない。

しかし「突然」というからには何らかの状態変化が突然生じていなければならぬ。ではその変化とは何か。これを解く鍵が(4b, e)の「覚える」という動詞であろう。つまり身体の状態が突然空腹になったり疲れたりすることは考えにくい、空腹や疲れを自覚することが突然であることはあり得るのである。そしてそれは(1)のような文でも同様だろう。例えば(1a)は次のように言い換えてもよいと考えられる。

(5) Ann suddenly realized that she was hungry.

ここで **realize** という語を用いたが、この **realize** について Comrie (1976) が、(3)の **know** と対比させつつ、次のような興味深いことを述べている。

(6) *Know* thus differs from *realise*, which refers explicitly to entry into a new situation, and can be used in the Progressive (*he's slowly realising what's happening*).
(Comrie 1976:20)

つまり **know** が基本的に「知っている状態」を示すのに対し、**realize** は「認識していない状態」から「認識している状態」という新たな状況への移行を示す動詞だということである。

以上の考察を踏まえた上で、次節では具体的・実証的な調査について見ていきたい。

3

本節では **suddenly** の振る舞いについてコーパスを用いて詳しく見ていく。もっとも本稿の目的は **suddenly** そのものの振る舞いではなく、あくまでも (1) に見るような文での振る舞いを観察することであるから、状態動詞と **suddenly** とが共起している例について考察する。とはいえ一口に状態動詞と言ってもたくさんある。そこで、「状態」を表す最も一般的な動詞は **be** であるから、本稿では対象を **be** に限定させて頂く。**be** と **suddenly** が共起することはあるのか。あるとすれば (2) で見たように状態変化を表すのか、それとも認識の変化を表すのか。この点についてコーパスを使って調査した。

3.1 調査方法

本研究の行った調査は具体的には以下の通りである。

まず **British National Corpus** (以下 **BNC** と略記する) を用いて **be** と **suddenly** が共起している文を検索してみたところ、多数ヒットした。ここで注意すべきはこれらは単に「同一の文中に **be** と **suddenly** とが現れる文」というだけのことで、**suddenly** が **be** を修飾しているとは限らないということだ。多数の例文がヒットしたのはこのためである。

そこでこれら多数の例文の中からランダムに300例を抽出した。さらにこれをもう一度繰り返し、合計600例を得た。もっともこのやり方と同じ例文が先の300例にも後の300例にも選ばれてしまっている可能性があるし、事実としてもそのような例文は見つかった。そこで重複して選ばれた例文は一方だけを残して他方を削除したところ、578例が残った。これは調査のために十分な量であると判断し、これら578例を対象とすることにした。

次にこれら578例について以下の点を調べた。

- (7) a. suddenly は be を修飾しているか。
 b. もしそうなら、be はどのような性質のものか。
 c. suddenly が修飾しているのが be でなければ、どのような動詞を修飾しているか。
 d. suddenly が修飾しているのはどのような事態か。

(7b) についてはもう少し詳しい説明が必要だろう。be は動詞として存在を表すのに加え、形容詞等を伴って状態を表すこともある。むしろ後者の用法の方が多用され、こちらが一般的な用法だと言ってよいと思われる。この「形容詞等」には現在分詞や過去分詞も含まれ、こうした用法での be は助動詞とされるのが普通である。be のこうした様々な用法のうちのいずれに該当するものが suddenly に修飾されているかを観察するのは極めて重要だと考えられるので、この点について調査した。

3.2 調査結果

3.2.1 suddenly が be を修飾している場合

全578例中、suddenly が be を修飾していたのは238例のみで、339例では別の動詞を修飾していた。これ以外に判断のつきにくかったものが1例あった。それを (8a) に示す。

- (8) a. At the end of August 1914 he was promoted to Brigadier on the field; so suddenly that an elderly spinster had to furnish him with stars unsewn from her father's uniform. (BNC: K91)
 b. Suddenly frightened, she wondered if she was going to have an operation[.] (BNC: H7H)

(8a) は suddenly が修飾している語が明示されていない例であるが、“he

was promoted to Brigadier on the field so suddenly that ...”の一部が省略されているのだと考えれば suddenly は was promoted を修飾していることになる。すると suddenly が be を修飾している例ということになるのでこれも加えると、全578例中 suddenly が be を修飾しているのが239例となる。

なお (8b) に見るように、分詞構文等のため being が省略されていることが明らかであり、かつ suddenly はこの省略されている being を修飾していると判断される文が21例（うち < be + 形容詞 > 15例、< be + 過去分詞 > 6例）あったが、これらは全て suddenly が be を修飾しているものとして239例の中に含めた。これに関して注意すべきは、こうした例はたまたまヒットしたのだということである。suddenly が修飾しているはずの being は実際には省略されているのだから、「同一文中に be と suddenly とが現れる文」という条件に合致せず、検索しても本来ならばヒットしないはずだ。ところが偶然、同一文中に suddenly とは全く無関係の be が一多くの場合別の節中に一現れることがあり、その場合に限ってヒットするわけである。例えば (8b) であれば同一文中に “if she was going” の “was” がたまたまあったがために拾われた例だと言える。この点には注意を要する。

3.2.1.1 be に形容詞が後続する場合

(1a) は suddenly が < be + 形容詞 > を修飾している文である。これが本研究の出発点なのだから、手始めに < be + 形容詞 > から見ていこう。

全578例中 < be + 形容詞 > に該当したのは73例で、筆者の感覚では予想よりも多かった。もっとも6割近くに相当する43の形容詞は一度現れているのみである。複数回現れたものを以下に列挙する。

- (9) a. 2回 = close, cold, conscious, full, harsh, more (than), (too) much, quiet, serious, strong
 b. 3回 = clear, (not) enough
 c. 4回 = aware

これはあくまでもコーパスの中から **be** と **suddenly** が共起している文をランダムに578例拾い上げたものの中での調査であるから、たまたま1例しか含まれなかった（実際にはもっと頻度が高い）、あるいはたまたま2例含まれた（実際にはもっと頻度が低い）形容詞もあるだろう。そのような中でも **aware** の出現回数が4回というのは例外的に多いと言え、**aware** が極めて頻度の高い形容詞であろうという点については信頼してよいものと思われる。加えて **aware** が人の認識を表す形容詞である点は重要である。

be aware は状態を表すが、(2)や(3)で確認したことを考慮に入れると、**suddenly** と共起すると起動相、言い換えると状態変化を表すと考えられる。これはすなわち **be suddenly aware** は **suddenly realize** と類似の意味を表すということである。第2節で見たように **suddenly** には「状態変化が突然であること」を表す場合と「認識の変化が突然であること」を表す場合の2つの用法があると予想され、両者を区別することが重要だと考えられるが、**aware** は認識を表す形容詞なのだから、**be suddenly aware** は後者、すなわち「認識の突然の変化」を表しているわけである。

clear は3回現れているが、うち2例が「明らかだ」という意味で用いられており（残りの1例については(16)で触れる）、人の認識を表していると言える。この点で **clear** は **aware** に近い（むしろ **be clear** の主語は「明らかである事柄」、**be aware** の主語は「認識している主体」という違いがあるが）。**be suddenly clear** は「突然明らかになる」ということだから「認識の突然の変化」を表している。さらに **conscious** も2回現れているが、いずれも(10c)のように「突然気づく、意識する」という意味で用いられている。このように認識を表す形容詞の頻度が高いことは注目に値する。

(10) a. Suddenly she was aware of how little she knew Roman.

(BNC: GUE)

b. ‘Silly, really, I’ve been sitting here puzzling about what to do and it’s

suddenly clear.’ (BNC: G3S)

c. As I lay in the ditch I was suddenly conscious of a very strong
 indescribably sickly smell. (BNC: A61)

ではそれ以外の形容詞についても見てみよう。quiet、serious、harsh、close
 など実際に状態変化が突然起こり得る。quiet であれば騒がしかった周囲が
 突然静かになることはあり得ることだ（なお quiet の 2 例の主語はいずれも it
 で、その場の状況を指している）。類似の形容詞として silent が 1 例だけでは
 あるが見られた。

(11) a. And it was so quiet, suddenly, that their ears seemed to be singing.

(BNC: EFJ)

b. ‘No,’ said Aline, suddenly serious[.] (BNC: G0M)

c. Cornelius’s voice was suddenly harsh[.] (BNC: H8T)

d. [H]e continued softly, his face suddenly very close to hers, ‘you made
 a few wrong moves yourself, so this muddle is partly your fault too.’

(BNC: HGY)

e. His eyes were suddenly cold and implacable. (BNC: JY4)

f. Emily was suddenly cold. (BNC: CKD)

serious も、話し相手の態度が突然改まって真顔で話し出すということはある
 得る。実際 serious の 2 例では主語はいずれも人であり、しかも一人称では
 ない人物だった。なおすでに前節で確認したが、(11b) から分かるように
 being が省略されている<(being) 形容詞>を suddenly が修飾している例も多
 数 (15例) 見られる。

harsh の 2 例では、(11c) に見るように、主語はいずれも voice だった。つ
 まりこうした場合の be suddenly harsh は「(声や口調が) 突然険しく (きつ

く) なる」ことを意味するのであり、実際に突然起こっても不思議ではない状態変化を表していると言える。strong の2例のうちの1例でも主語が voice であり、しかも “stronger” と比較級の形で用いられていて、harsh と類似の例だと言ってよい。

(11d) は close の例であるが、これも「突然顔を近づけてきた」ということだから突然の状態変化が実際に生じている。close の2例はいずれもこのように状態変化を表していた。

このように実際に状態変化が生じている例が多数観察されたのだが、それが全てというわけではない。(11e) および (11f) は cold の例で、これらも基本的には状態変化が生じている例だと考えられるが、それぞれに興味深い点がある。(11e) では cold が implacable と並べられているのだから、ある人物が「目のあたりが冷たい」と感じた、というのではなく、他者の目から見るとその人物の目つきが冷たく、冷淡に（もしくは「冷酷に」）感じられるようになった、ということを表している。なので実際に目つきや表情に状態変化が生じたのだと考えられるが、しかし他者の表情の変化を単に「変化した」と捉えるのではなく「冷淡になった」と捉えるのはある面で観察者の主観の問題だとも言える。つまり (11e) の suddenly は基本的には「状態変化が突然であること」を表していると考えられるが、その状態変化とは「ある人物の目つきの物理的変化」と「それを捉える観察者の心理的な判断」との二重構造になっているのである。もちろんこれは「すでに目つきが冷淡になっていたことに突然気づいた」ということではないので、これまで述べてきたような（あるいは(1)に見るような）「認識の変化」とはタイプが異なるが、それにしても「突然の状態変化」と言っても決して単純なものではないことが分かる。

これまで「状態変化」と「認識の変化」の二つを区別してきたが、以上の議論を整理すると、実際には以下の三つに分けるのが適切だということになる。

(12) a. 物理的な状態変化

b. 人間の内面における変化（心理的・精神的変化、認識の変化、判断の変化等を含む）

c. 物理的な状態変化はすでに生じているのだが、それに気づいていない人がある時点でその変化を認識する、という変化

本稿がこれまで「状態変化」と呼んできたのは (12a)、「認識の変化」と呼んできたのは (12c) であるが、(11e) では (12a) と (12b) の二重構造になっているのだと言える。

さて (11f) であるが、何を意味するのかこの一文だけでは判断がつかない。そこで前後の文脈を確認すると以下のようなものであることが分かった⁴。

(13) ‘Hush, my dear, you don’t want your aunt to hear us talk ill about her son. Now listen to me, all you feel for your cousin is only a childhood fancy.’

His lip tightened.

‘In any case, things are different now, you must see that. The man is a rogue, he stole from his own firm and now that he is serving time in Swansea Prison, I could never allow him near you, let alone marry you.’

Emily was suddenly cold.

‘This is the first I’ve heard of your objection, father!’

She could hardly believe her own ears.

‘You know that Craig is innocent.’

文脈の中で捉えると「寒くなった、寒気がした」という意味であることが分かる。また (11e) が「他者の目から見て cold となった」ことを表しているのに対し、こちらは「Emily 本人が cold となった」ことを表しているのであって、同じ cold でも大きく異なる。加えて、Emily が心理的に寒気を感じたのは事実だが、物理的に気温が下がったわけではない。つまり (12b) の意味で

のある種の「状態変化」が生じたのだと言える。(11e)と(11f)とはこの点では共通している。ただ(11f)には(12a)の要素が欠けている。

さて次に扱うのは「程度を表す形容詞」とでも呼ぶべき形容詞群であり、具体的には(9)では(not) enough、full、more (than)、(too) muchが相当する。これらについても状態変化と認識の変化のいずれが生じているのか判断が難しい。一つ言えるのは(12a)の「物理的变化」よりもむしろ(12b)の変化、とりわけ感情の変化が生じている例が多く見られたということだ。感情が急に高ぶり、ある一定の限度を超えると、これまでの状態が物足りなくなるとか、そういった用いられ方のものが多い。

(9)で述べたように enough は3例見られたが、興味深いことに3例とも否定文中で用いられていた。これは言い換えると enough は「突然十分でなくなる」という文脈で用いられることが多いということである。そのため本稿では“(not) enough”と表記してきた。そのうちの1例を以下に示す。

(14) ‘Of course we can manage,’ she said and grinning added, ‘I’m a big girl now.’

Then suddenly that was not enough.

(BNC: A6J)

これは発言者である she が発言をし、その直後に気が変わって「今言ったことだけでは不十分だ、物足りない」と突然感じた、ということである。発言を終えた時点と気が変わった時点との間に時間の経過はほとんどないが、それでも発言を終えた時点では「この発言で十分」と感じていたはずなので(そうでなければ後になって「不十分だ」と思い直すというのは論理的におかしい)、(12b)と(12c)との組み合わせ、すなわち発言者の内部で気持ちの変化が突然に生じ、その結果自分の発言が不十分だと認識するに至った、と分析すべきであろう。このように「程度を表す形容詞」に関しては突然の変化を(12b)

と (12c) との組み合わせとして捉えるべき例が多いようである。具体的に言えば「急に気が変わって我慢の限界に達している (あるいは超えている) 自分に気づく」、あるいは逆に「急に気が変わってこれまで満足してきたものに物足りなさを感じている自分に気づく」という意味で用いられている例が多数観察された。

(15) a. Blood began to course into the gristle to make it erect again, and he was suddenly full of urgent need. (BNC: FPX)

b. The temptation to evade the truth was suddenly almost more than Harry could bear, so aching did he want to go home. (BNC: K8S)

c. But, ashamed and proud, the boy said nothing, until suddenly his feelings were too much for him. (BNC: GWH)

(15b) に見るように **more** の 2 例は < **more than** + 節 > というパターンで用いられており、果たしてこれらを形容詞の用例に含めてよいのか判断に迷うが、「程度を表す形容詞」の中にも含めることにした。また (15c) に見るように **much** の 2 例はいずれも “too much” の形で現れており、興味深い。

さて、(9) で確認したように 2 回以上現れた形容詞がいくつか観察されたわけだが、すでに触れたように **clear** の 3 例のうち 1 例は他の 2 例とは意味が異なっていたし、**cold** の 2 例も (11e, f) で見たように意味が互いに異なっていた。これらを別の形容詞として数えるならば、結局のところほとんどの形容詞は一度きりしか現れていないということになる。そういうわけで (9) で取り上げなかった、一度現れているのみの 43 の形容詞も重要だと考えられるので、これらについても簡単に見ておこう。まずは **clear** の他の 2 例と異なる例を見る。

(16) Down the clachan street he ducked and dodged through the retiring

clansmen, half-hidden by the smoke, Lachlan yelling after him, till suddenly they were clear of the huts and into the fight round the ships.

(BNC: APW、綴り等原文のまま)

(16)の **he** は **Lachlan** なる人物から走って逃げていて、結果として突然小屋のない場所に出た、ということである。したがって状態変化は生じておらず—無論 **he** が移動するという状態変化は起こっているが、「小屋がある状態」から「ない状態」へと突然変化したわけではない—起きているのは **he** が別の場所へと移動したことによって生じた認識の変化—「さっきまでいたところには小屋がたくさんあった」という認識から「今いる場所には小屋がない」という認識への突然の変化—であり、典型的な (12c) の例だと言える。

もっともこのような (12c) の典型的な例—それは (1a) もそうだが—は少ない。(17a) は一見すると (1a) とよく似ており、「彼女は喉が乾燥していることに突然気づいた」という意味かと思ったが、前後の文脈を確認すると、話し相手の発言を聞いて衝撃を受け「突然喉が乾燥しているような気になった」という意味だった。つまり (11e, f) に近い用法だと言える。また (17b) は (12c) の「認識の変化」の例と考えてよいと思われるが、「**suddenly** が **being prickle** を修飾しているが **being** が省略されている」というよりはむしろ「**suddenly** は **felt prickle** を修飾している」と考える方が適切な例のように思われる。

(17) a. Her throat was suddenly dry. (BNC: JY3)

b. Chas felt his hair suddenly prickle, as if it was full of nits.

(BNC: H83)

以上をまとめると次のようになろう。**suddenly** が < **be** + 形容詞 > を修飾している文は物理的な状態変化を表しているものが多く、認識の変化を表してい

るものは少ない。ただし「物理的な変化」ではなく「人間の内部における心の変化」を表しているものも少なからず観察され、そのような例では「心の変化」と「認識の変化」のいずれが適切か判断が困難なものも多い。もっとも認識の変化を表したい場合には **aware**、**clear** といった形容詞を用いて明示することが多く、こうした形容詞は他の形容詞と比べて頻度が高い。

(「suddenly 考 (2)」に続く)

注

- 1) (1b) については少々説明が必要かもしれない。この例文の出典はアメリカのティーンエイジャー向け現代小説で、主人公でもある一人称の語り手が基本的に現在時制で出来事を語っていく体裁を取った物語である。(1b) の **he** は主人公の兄を指し、主人公と兄は自宅の近くにある大木の根元に空いた大きな穴 (文中の **cave** はこれを指す) を長年、いわゆる「秘密基地」のようなものとして利用してきたことがこの文の背景にある。
- 2) 「到達 (achievement)」とは状態変化が瞬間的に生じる動作のことである。Vendler (1967:102) は次のように述べる。“[V] erbs like *knowing* and *recognizing* do not indicate processes going on in time, yet they may be predicated of a subject for a given time with truth or falsity. Now some of these verbs can be predicated only for single moments of time (strictly speaking), while others can be predicated for shorter or longer periods of time.”
この “some of these verbs can be predicated only for single moments of time” が「到達」に当たり、他方 “others can be predicated for shorter or longer periods of time” とあるのが「状態」に相当する。
- 3) ここでいう「完結相」とは(2)にもあるように **perfective** のことであって、英語では「**have** + 過去分詞」で示される **perfect** のことではなく、ま

た動詞の語彙的アスペクトの一種である *telic* でもないので注意。
perfective が「完了相」と呼ばれることもあるが、ここでは誤解を与えないよう「完結相」と呼んでおくことにする。

- 4) この一節の出典はBNCで“CKD”のidが与えられている文章であるが、これは Iris Gower 著 *The shoemaker's daughter* という小説から採られたものとのことだ。

引用文献

British National Corpus <http://www.natcorp.ox.ac.uk/>

SGT = Raymond Carver, “A Small, Good Thing”, in *Where I'm Calling From*,
New York: Vintage Contemporaries, 1989, pp.376-405.

SYH = Jo Knowles, *See You at Harry's*, Somerville, Massachusetts:
Candlewick Press, 2012.

参考文献

Comrie, Bernard (1976), *Aspect*, Cambridge: Cambridge University Press.

Croft, William (2012), *Verbs — Aspect and Causal Structure*, Oxford: Oxford
University Press.

Dowty, David R. (1979), *Word Meaning and Montague Grammar*, Dordrecht/
Boston/London: D. Reidel Publishing Company.

Vendler, Zeno (1967), “Verbs and Times”, in *Linguistics in Philosophy*, Ithaca,
New York: Cornell University Press, pp.97-121.

On *suddenly*: Part 1

Kimihiko Kuromiya

This article proposes that the word *suddenly* has two senses, one which represents an instantaneous change of state, and the other describing a speaker's realization of a change of state that has already taken place before the utterance. *Ann was suddenly hungry* is an example of the latter.

In Part 1 we will verify the proposal above through observing some sentences, taken from *the British National Corpus*, where *suddenly* modifies <be + Adjective>.

暗号電報誤読の悲劇 — 日米開戦前夜 —

多 賀 敏 行

昭和16年（1941年）4月から開始された日米交渉はなかなか進展を見ず、同年12月8日に開戦という事態に至ってしまった。

アメリカは4月頃から日本の暗号電報を解読していたことはよく知られている。しかしそのアメリカ側の解読の仕方には多くの誤りがあったこと、しかもその誤りがかなり深刻であったことは余り知られていない。

西 春彦（開戦当時の外務次官）著『回想の日本外交』（岩波新書 1965年）

ジョン・トーランド著『大日本帝国の興亡』（毎日新聞社外信部訳 毎日新聞社 1971年）

という二冊の書物の中にある記述に従ってその誤りを紹介したい。

外務省から在米日本大使館へは日本語で暗号電報を打っていた。アメリカ側ではその電報を電信局から受け取り、陸軍省と海軍省で代わる代わる解読して日本語の原文を出し、それを英訳したものをハル國務長官やルーズベルト大統領などに回していた。ルーズベルト大統領は解読した日本の電報を「マジック」と称して、「マジックが来た、マジックが来た」と言って読んでいたらしい。

昭和16年10月16日に東条内閣が組織された。この内閣で東郷茂徳氏が外相となった。東郷外相は中国駐兵問題について撤兵期限を付し、一応25年駐兵とする日本側案について、大変な努力をおこない、軍から了承を取りつけた。これを基礎とした対米交渉のための案が「甲案」であった。これは日米交渉におけ

る最初の期限付き撤兵案であった。「甲案」がうまく行かない場合の暫定的解決案として「乙案」(米英側が日本資産の凍結解除をすることを条件として日本は南部仏印から撤兵するとの内容)が決定された。

日本は戦争に敗れ、その直後に設置された極東国際軍事裁判で西春彦氏は東郷元外務大臣の弁護人となった。国務省日本担当者バラントインは宣誓供述で、東郷元外務大臣が苦心して作り上げた甲案について何ら言及せず、もっぱら乙案を問題としていたので、西春彦氏は不審に思い、東郷の米国人弁護人に頼んで反対尋問してもらった。

これに対し、バラントインは「アメリカは日本外務省の電報を傍受しており、甲案に関する説明電報を解読して、日本政府に交渉に対する誠意がないことが分かった。…だから甲案に触れなかった。」と述べた。

西氏は『回想の日本外交』の中でこのように述べている。

しかし私には、交渉の誠意がないと思われるような不真面目な訓令を出した覚えはない。どうにも不思議なので、書類のどこに原因があるのか、いろいろ探してみた。ちょうどその二、三日前に、検事部の方から例のインターセプテッド・メッセージ、つまり傍受電報を英訳したものがきていた。これを見ると、なんとなく似てはいるが、私の記憶とはまるでちがった文句の電報がある。よく読んでみると、それが十一月四日の、東郷大臣発野村大使宛電報第七二六号、つまり甲案の内容とそれに説明を加えた電報の英訳であった。そこで、この向こうで作った英訳を、日本の原文と比べてみると、たいへんなちがいがあることがわかった。英文のほうを読むと、これはだれが見ても、日本政府には交渉に対する誠意はない、アメリカをごまかすために交渉させているのだという印象を受ける。日米交渉当時、ハル国務長官あたりが甲案について何ら反応を示さないので不思議だと思っていたが、この英訳を見て、はじめて原因がわかった。この傍受電

報の英訳が日米交渉の決裂した大きな原因の一つだ。いろいろな国際間の葛藤が誤解から起るといえるが、本当にこういう思いもかけないことから誤解が生れるのだと、今更のように気づいて、その晩はもう寝られないほどだった。

誤訳のオンパレード

それでは如何に「曲解」されていたかを具体的に見てみよう。

昭和十六年十一月四日東郷大臣発大使宛電報第七二六号の中には、冒頭に「破綻ニ瀕セル日米外交ノ調整ニ付テハ日夜腐心シ居ル処」とある。これを米陸軍省は、このように訳していた。

THE RELATIONS BETWEEN JAPAN AND THE UNITED STATES
HAVE REACHED THE EDGE, AND OUR PEOPLE ARE LOSING
CONFIDENCE IN THE POSSIBILITY OF EVER ADJUSTING THEM.

(日米関係は崖っぷちのところに来ており、我々はその関係を調整できるかということについては自信を無くしつつある) [多賀訳]

ここでは原文にある「日夜腐心」するという意味が全く無視されていたのである。関係修復のために何とかしようと頑張っている、という主旨が、英文では関係修復は無理だと諦めつつあるような印象を与えるものに誤訳されている。

さらに「帝国内外ノ事態ハ極メテ急迫ヲ告ゲ今ヤ一日ヲモ虚シクスルヲ許サル状態ニアルモ帝国政府ハ日米間ノ平和関係ヲ維持セントスル誠意ヨリ熟慮ノ結果交渉ヲ継続スルモノナルガ」という文面の英訳にも問題があった。

「交渉ヲ継続スル」という部分を“GAMBLE ONCE MORE ON THE CONTINUANCE OF THE PARLEYS”と訳しているのだ。ここで問題なのは、GAMBLE ONCE MORE（今一度賭(と)す）という表現である。

同様に、「即チ今次折衝ノ正否ハ帝国国運ニ甚大ノ影響アリテ実ニ皇国安危

ニ係ハルモノナリ」も、

IN FACT, WE GAMBLER THE FATE OF OUR LAND ON THE THROW
OF THIS DICE.

と訳されている。ここでも GAMBLE が使われており、同様の問題がある。日本側は真摯に平和を維持しようとしておらず、諦めつつ、捨て鉢になっているようだという印象が、こうした曲解によって作られてしまっている。

更に同じ十一月四日付で甲案の内容とともに交渉の方針を訓令した東郷大臣発野村大使宛電報第七二六号の日本語原文と米側訳文（同日、米陸軍訳）の間には、全面的に日本政府の誠意を疑わせることとなる曲訳がある。この中で撤兵問題について原文では、

支那事変ノ為支那ニ派遣セラレタル日本国軍ハ北支及蒙疆ノ一定地域及海南島ニ関シテハ日支間平和成立後所用期間駐屯スヘク爾余ノ軍隊ハ平和成立ト同時ニ日支間ニ別ニ定メラルル所ニ從ヒ撤去ヲ開始シ治安確立ト共ニ二年以内ニ之ヲ完了スヘシ

となっている。今ではこの文章自体が読みづらいので“現代語”訳すれば、「支那事変のため支那に派遣されている日本軍は支那及び蒙疆の一定地域と海南島に関しては、日本と支那の間で平和が成立後、ある所要期間駐屯するが、他の軍隊は平和が成立すると同時に、二国間で別に定めたとおりに撤去を開始し、現地の治安が確立したら二年以内に撤去を完了すべし」となる。この中にある「所要期間」については、アメリカから質問された場合には、「概ネ二十五年ヲ目途トスルモノナル旨ヲ以テ応酬スルモノトス」、つまり約二十五年を目途にするということで交渉をしよう、と言っているのであるが、これを米側訳文では、

NOTE: SHOULD THE AMERICAN AUTHORITIES QUESTION YOU IN REGARD TO “THE SUITABLE PERIOD (FOR RETAINING JAPANESE TROOPS IN CHINA)”, ANSWER VAGUELY THAT SUCH A PERIOD SHOULD ENCOMPASS 25 YEARS.

となっている。この英文を意識すると、「アメリカから撤兵の所要期間について聞かれたら、二十五年くらいとぼかして答えよ」くらいになるだろうか。この VAGUELY（漠然と）という訳は誤りである上に、極めて悪い印象を与える。まず最初に言えるのは日本文の中に「漠然と」答えよとの趣旨は書かれておらず、にもかかわらず「漠然と」という言葉を入れるのは誤訳である。「所要期間」は THE SUITABLE PERIOD ではなく、THE NECESSARY PERIOD あるいは THE NECESSARY DURATION と訳すべきである。日本文を素直に訳すところなるという例としてトーランドは次の英文を提示している。

Note: In case the United States inquires into the length of the necessary duration, reply is to be made to the effect that the approximate goal is 25 years.

誤魔化そうとする日本？

誤訳はまだある。原文に「米側力不確定期間ノ駐兵ニ強ク反対スルニ鑑ミ駐兵地域及期間ヲ示シ以テ其ノ疑惑ヲ解カントスルモノナリ」とあるのが米側訳は以下のようにになっている。

IN VIEW OF THE FACT THAT THE UNITED STATES IS SO MUCH OPPOSED TO OUR STATIONING SOLDIERS IN UNDEFINED AREA, OUR PURPOSE IS TO SHIFT THE REGION OF OCCUPATION AND OUR OFFICIALS, THUS ATTEMPTING TO DISPEL THEIR

SUSPICIONS.

これをまた直訳してみると、「アメリカが我々（日本）の確定していない地域への駐兵に強く反対しているということに鑑み、占領地域と我々の官吏を移動させて、彼らの疑惑を消滅させようというのが我々の狙いである」となる。原文が疑惑を解消するためにきちんとした解答をすべきだ、という意味なのに対して、曲訳版では、疑惑を消すためにとりあえずこうしておこう、というようなニュアンスが伝わってくる。その他にも、どうして原文にない「官吏」が急に出てくるのかといった点を含め、問題の多い訳である。

また、原文の「此ノ際ハ飽ク迄所要期間ナル抽象的の字句ニヨリ折衝セラレ無期限永久駐兵ニ非サル旨ヲ印象ツクル様御努力相成度シ」という箇所が米側訳では、啞然とするほど曲訳されてしまっていた。

WE HAVE HITHERTO COUCHED OUR ANSWERS IN VAGUE TERMS. I WANT YOU IN AS INDECISIVE YET AS PLEASANT LANGUAGE AS POSSIBLE TO EUPHEMIZE AND TRY TO IMPART TO THEM TO THE EFFECT THAT UNLIMITED OCCUPATION DOES NOT MEAN PERPETUAL OCCUPATION.

これを直訳すると、「我々は今まで我々の答えを曖昧なる言辞でもって覆い尽くしてきた。貴使には今回、出来るだけ不徹底にして、しかも快適な言辞にて、米側に無期限占領は永久の占領を意味するものではないとの趣旨を伝えて欲しい」となる。IN VAGUE TERMS（曖昧なる言辞をもって）とか、IN AS INDECISIVE YET AS PLEASANT LANGUAGE AS POSSIBLE（出来るだけ不徹底にして、しかも快適な言辞にて）という英訳が悪意に満ちた訳であることをさておいても、最後の THAT UNLIMITED OCCUPATION DOES NOT MEAN PERPETUAL OCCUPATION は、原文の日本語の文法上の基本的構造

を理解していない稚拙極まる誤訳である。つまり日本文の意味は「軍は必要とされる期間は駐留するがその駐留は無期限でも永久でもない」であるのに、英訳では「無期限の駐留は永久の駐留ではない」という意味に曲げられている。

ここまででお分りのとおり、原文の日本語では「何とかアメリカが納得する平和的解決案を提示したい」という気持ちが伝わってくるのに対して、「マジック」の英文では「何とかアメリカをごまかしてやり過ぎしたい」という姿勢が伝わってくるようになってしまっているのである。

幻の四原則

更に誤訳以前の間違いもなされていた。この十一月四日付の電報の甲案は、大きくわけて

- (一) 通商無差別問題
- (二) 三国条約ノ解釈及履行問題
- (三) 撤兵問題

の三つからなっていた。(電報の原文は付録参照) その三つの問題についての記述のあとに、こういう一節が登場する。

尚四原則ニ付テハ日米間ノ正式妥結事項(了解案タルト又ハ其他ノ声明タルヲ問ハス) 中ニ包含セシムルコトハ極力回避スルモノトス

ここでいう「四原則」とは、ハル國務長官がかねてより主張していた

- (一) 領土保全
- (二) 内政不干涉
- (三) 通商の機会均等
- (四) 紛争の平和的解決

という四つの原則のことを指している。電報では、四原則については日米間の今回の正式な取り決め事項には入れないように極力努力すべし、ということをし

述べていたのである。これはあくまでもその前の三つの問題のこととは切り離して考えよう、ということで甲案のいわば補足あるいは但し書きのような文章だった。

ところがこの文は「マジック」では次のように訳されてしまった。

(4) AS A MATTER OF PRINCIPLE, WE ARE ANXIOUS TO AVOID HAVING THIS INSERTED IN THE DRAFT OF FORMAL PROPOSAL REACHED BETWEEN JAPAN AND THE UNITED STATES . . .

(四) 原則問題として、日本はこれが日米間で合意された正式提案の草案に挿入されることを是非とも避けたい。[多賀訳]

つまり、こういうことである。「尚四原則…」という一文の中の一文字である「四」を勝手に引き剥がしてしまって、甲案の三つの項目、すなわち

- (一) 通商無差別問題
- (二) 三国条約ノ解釈及履行問題
- (三) 撤兵問題

に続く四番目の項目、

(四)

が存在しているかのように仕立てしまったのだ。そしてこの文が四番目の項目とみえるように、直訳すれば“WITH REGARD TO THE FOUR PRINCIPLES (OF MR. HULL)”となるべきところをわざわざ「マジック」では“(4) AS A MATTER OF PRINCIPLE”と()まで使って「(四) 原則に係わる問題として」と勝手に変えてしまった。おまけに恣意的に原文にはない“ANXIOUS”という言葉を挿入してしまった。

その結果、存在していなかった甲案の(四)という項目が急に登場することになった。そしてそこで述べていることは、(一)～(三)までの提案は提案として、本当はそんなことをまともに話し合うことは避けたい、ということに

なる。それでは（一）～（三）の案に一体何の意味があるのか、というふうに思われても不思議はない。

これらの誤訳に引きずられてしまった結果、ハルは「日本側は甲案についてはまともに話し合う気がない」と確信するに至ったということである。実際の日本の意図はハル国務長官のいわゆる「四原則」を正式文書にいれたくないというだけに過ぎなかったのに、これが曲解されてしまったのである。

太平洋戦争が何故起きたかという問題については以前より多くの研究家が書物を著わしており、また特に最近優れた著作が出ているが、米側による日本の暗号電報誤訳が開戦の原因としてどの程度の重要性を持ったのかという点について関心は余り高くはないように思われる。筆者はこの問題はもっと研究されても良いのではないかという思いを抱いている。

付録 十一月四日東郷大臣発野村大使宛電報第七二六号（部分）

一、甲案

本案ハ九月二十五日我方提案ヲ既往ノ交渉経過ニヨリ判明セル米側ノ希望ニ出来ル限り「ミート」スル趣旨ヲ以テ修正セル最後の譲歩案ニシテ懸案ノ三問題ニ付我方主張ヲ左記ノ通り緩和セルモノナリ

（一）通商無差別問題

九月二十五日案ニテ徹底妥結ノ見込ナキ際ハ「日本国政府ハ無差別原則ガ全世界ニ適用セサルモノナルニ於テハ太平洋全域即支那ニ於テモ本原則ノ行ハルルコトヲ承認ス」ト修正ス

（二）三国条約ノ解釈及履行問題

我方ニ於テ自衛権ノ解釈ヲ濫リニ拡大スル意図ナキコトヲ更ニ明瞭ニスルト共ニ三国条約ノ解釈及履行ニ関シテハ従来縷々説明セル如ク帝国政府ノ自ラ決定スル所ニ依リテ行動スル次第ニシテ此点ハ既ニ米国側ノ了承ヲ得タルモノナリト思考スル旨ヲ以テ応酬ス

(三) 撤兵問題

本件ハ左記ノ通り緩和ス

(A) 支那ニ於ケル駐兵及撤兵

支那事變ノ為支那ニ派遣セラレタル日本国軍隊ハ北支及蒙疆ノ一定地域及海南島ニ関シテハ日支間平和成立後所用期間駐屯スヘク爾余ノ軍隊ハ平和成立ト同時ニ日支間ニ別ニ定メラルル所ニ從ヒ撤去ヲ開始シ治安確立ト共ニ二年以内ニ之ヲ完了スヘシ

(註) 所用期間ニ付米側ヨリ質問アリタル場合ハ概ネ二十五年ヲ目途トスルモノナル旨ヲ以テ応酬スルモノトス

(B) 仏印ニ於ケル駐兵及撤兵

日本国政府ハ仏領印度支那ノ領土主權ヲ尊重ス現ニ仏領印度支那ニ派遣セラレ居ル日本国軍隊ハ支那事變ニシテ解決スルカ又ハ公正ナル極東平和ノ確立スルニ於テハ直ニ之ヲ撤去スヘシ

尚四原則ニ付テハ之ヲ日米間ノ正式妥結事項(了解案タルト又ハ其他ノ声明タルヲ問ハス) 中ニ包括セシムルコトハ極力回避スルモノトス(後略)

主要参考文献

多賀敏行『「エコノミック・アニマル」は褒め言葉だった — 誤解と誤訳の近現代史 —』新潮新書 2004年

西 春彦『回想の日本外交』岩波新書 1965年

ジョン・トーランド『大日本帝國の興亡』毎日新聞社外信部訳 毎日新聞社 1971年

井上寿一『教養としての「昭和史」集中講義』SB新書 2016年

加藤陽子『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』新潮文庫 2016年

The Tragedy of Mistranslations of the Japanese Diplomatic Cables — On the Eve of the War between Japan and the U.S. 1941

Toshiyuki Taga

Japan and the United States conducted negotiations from April to November of 1941 to resolve peacefully the dispute between the two countries.

The failure of the negotiations is considered to have led to the opening of the war between the two countries in December 1941.

It is well-known that coded diplomatic cables sent from the Foreign Ministry in Tokyo to the Japanese Embassy in Washington D.C. had been deciphered by the U.S. side and had been read by the top officials of the U.S. Government including President Roosevelt and Secretary of State Mr. Hull. It is also known that there had been certain mistranslations committed by the U.S. side and it is said that these mistranslations might have contributed to the failure of the negotiations.

This paper tries to ascertain how serious the mistranslations were.

『松原正全集 第三巻 戦争は無くならない』 (圭書房、平成二十九年二月)

平 松 良 康

昨年六月に他界された松原正氏の全集第三巻が、満を持して圭書房より刊行せられた。真に文学を愛し書物を好む読書人には、その質・量の圧倒的な充実は無論のこと、装丁・造本に至るまで細心の目配りが行き届き、まことに悦ばしい。誠実な本物の学者に相応しい凜とした見事な書冊である。

『第一巻 この世が舞台』が『人間通になる読書術』を基に編まれた、眼光紙背に徹る奇才の名著案内であり、『第二巻 文学と政治主義』が我が国の作家や恩師福田恆存に関する評論と、保守派のミニコミ誌『月曜評論』の連載時評とをまとめた特異な文化論であり、いよいよ第三巻は著者渾身の力作戦争論なのだが、「現象論のみに終始して本質論を回避する」、「『道義不在の防衛論』ばかりが横行する」愚者の楽園・日本に於いて、西洋精神との如何ともなし難い隔絶を承知の上で苦闘し続け、あるべき人間とあるがままの人間、理想と現実との両極の間を往来通行せんとした著者の真剣勝負の知的誠実が、どの巻のどの頁を開いても、気迫に満ちた端整な文章を通してひしひしと感じ取れる。

至極厄介なテーマを縦横に論じながら、その文章のリズムは飽くまで美しく心地良い。「文章に関する『不感症、無関心』はそのまま道徳に関する『不感症、無関心』だ」と堅く信ずる著者は、読者を楽しませつつ啓蒙する文章の工夫を凝らし、たびたび読者のために言葉遊びや息抜きを周到に用意したから、この六百頁近い大著も存外たやすく読み進める事が出来よう。著者の技量があるから読み易いけれども、読み流してはなるまい。簡単に解る類の主題ではないからである。安直な解決を拒絶する古くて新しい難問だからだが、時流を論

じて常に根本的な問題を深考する著者の論述が旧説と化する事はなく、それ故、読者は再読三読するごとに熟考を尽して片付かない難問の難問たる道理に改めて気付かされ、その理詰め之苦闘への感動を新たにする事になる。政治評論にも第一級の文学作品の美を求めたオーウェルの様に、著者は緻密かつ雄渾な、朗唱に値する滑脱流麗な文体を編み出した。T. S. エリオットと並んで彫心鏤骨のオーウェルは、松原氏が敬愛し学ばんとした道義的作家なのである。

文中に引用される多くの学者・評論家のその時逃れの空論・悪文は、往時は甘い読者をたぶらかせたとしても、読み返す価値は全く無い。(笑止千万にも、本物を気取る偽物は依然、死に学問の自己満足の、無くもがなの論文を書き散らし稼ぎまくるより他ないが。) それに比べて、直後にその文章の論理的欠陥を指摘する著者の辛辣な評言は、痛烈無比であり、棚卸しの名人芸を聴くかの如き趣がある。昨今つまらぬ言葉狩りの威勢に気おされて、悪口の表現の豊かさも技術も途絶えつつあるが、あくたもくたの応酬として立派な国語の伝統の一部なのであり、半量を入れる著者の絶妙な酷評は断じて区々たる揚げ足取りなどではない。最適の一語を選ぶ労を惜しめば、どんな大論文の堤も片言隻句の蟻の穴から崩壊するからだ。この点、本文中に言及される愛国心の定義でつとに有名な英国の文人ジョンソン博士が、隻語も漏らさず論敵を完膚無きまでに叩きのめす舌鋒の激しさ故に、その冷徹冷酷を指弾された事が想起されて興味深いのである。

「言挙げせぬ国」日本とは異なり、英国には社会主義者バーナード・ショーとカトリックのチェスタトンとの論戦に明らかな如く、議論の徹底とユーモアの余裕とが両立しうるまこと羨ましき文化がある。そのチェスタトンは、傾倒するジョンソン博士への非難に論駁して次の様に述べた。ジョンソンは劣れる論敵にも自分と同程度の知的誠実と真摯を期待したのだ、議論に負けるかも知れぬと覚悟の前で真剣勝負を常に挑み、事実勝利したから会話の暴君と呼ばれたのだ、威張りちらすと非難するより先に、この巨人の叡智のアクロバットを十分評価せよ、主張の押し付けや論理の帰結を嫌がるより先に、強制するに足

りの反論やそもそも論理を有する作家がどれだけあるか。倦む事なく何度も主張を説き続け、しかもその中身と意図の浅薄が全く暴露されない、そんな「鋼の如く強靱な頭脳」の持主がどこにあるか。「現代の我々の書物雑誌に氾濫する漫然とした多音節語を読むと、我々が知恵を見出したより寧ろ、才智すら喪失した事の方がいよいよ明白なのである」と。

現代日本にも通用するこの様な批評を読むと、松原氏は決してジョンソン博士の様にだらしくも怠惰でもないけれども、英国文学最良の特徴である才智を体得し、その戦争論や時事評論に於いて存分に発揮されたのだと感服する。ただ鉄面皮な論敵は、心酔者のボズウェルの様に徹底的に論破される悔しさ、恥かしさを痛感する事もなく、また英米の知識人がオーウェルの誠実な内戦の記録を故意に黙殺した如く、松原氏の矢継ぎ早の批判に対して、普遍的な論理と日本語の表現（文法）と言葉の音楽（リズム）とに基づく三方からの一斉攻撃に怖気付き、けれども蛙の面に水で、知らぬ顔の半兵衛を決め込んだ訳である。

知的・道義的怠惰を曝して著者に批判された主な学者・評論家・作家を章別に順に列記する。第一章「人間は犬畜生ではない」。殿岡昭郎、臼井善隆、川上宗薫、大江健三郎、永井陽之助、野坂昭如、筑紫哲也、家永三郎、ジョウゼフ・ミーカー。程度の差こそあれ、モンテーニュやロレンスやトルストイの様に思考を徹底せず、愛他主義と自己愛との激越な真の葛藤も知らず、「臍下三寸を持合せぬかの如く」「男根不在」の綺麗事を公表したから松原氏に難詰された。この章では、動物と人間との比較照応、とりわけ人類学的に「縄張を防衛しようとしないうゴリラ」と「本気で祖国を防衛しようとしないう国民」の自墮落の類似が印象的である。次章「生存が至高の価値か」。永井陽之助、高橋康也、西川潤が俎上に載せられる。「生存そのものが『中核価値』なのではない」と断じたソクラテスの生き方が論じられ、道化師フォールスタッフと後に名君となる断固たるハル王子、曖昧主義のエラスムスの愚昧と信念を貫く『四季の男』トマス・モアの剛毅とが対比される。続いて「正義は相対的である」

の章。久野収、大江健三郎、「あたらしい憲法のはなし」の筆者に小田実。彼らには力と正義とに関するパスカルの真摯な思考など薬にするほども無く、正邪善悪を気にする人間性を無視した楽天主義と、そのくせ我にもあらず「してはならない」だの「許されない」だの「せねばならぬ」だのと口走る軽率とが顕著に認められて論難される。断るまでもなく、ジョウゼフ・ヘラーの小説『キャッチ二十二』に登場する百七歳の売春宿の亭主の如く、生存だけが後生大事なら、柄にもなくその様な絶対命令の言葉は断じて口にしてはならぬ筈だからである。

無論、敵身方思考を超えた松原氏は、進歩派ばかりを論破した訳ではない。保革の別無く、決して愚者に容赦はしない。次章「侵略戦争は悪事か」。高坂正堯、猪木正道、『月曜評論』の保守派知識人、粕谷一希を著者は手厳しく難じた。彼らが何の根拠も示さず議論を棚上げし、「正義なんぞは二の次三の次にして、長い物に巻かれたがる」、その情けない習性をえぐり出した。そして、極東国際軍事裁判やフォークランド紛争、さらに ABCD 包囲陣から明治にまで「先行的行動」をさかのぼり日本の困難な歴史に就いて概括し、「侵略戦争を明確に定義出来」ず、「侵略の何たるかを遂に知る事が出来ない」なら、「なぜ、悪事とも善事とも知れぬ侵略戦争を、人々は忌むべき悪事と断じて怪しまない」のか、率直な小林秀雄とは異なり、なぜ反省なぞするのか、と疑問を呈する。

次章「力が正義なのか」。プラトンの対話篇やトゥキディデスの「戦史」を引用し、「政治と道徳とは切離すべきもの」か否かを論じ、T. S. エリオットのマキャヴェリ論を語り、西洋の人間中心主義の報いたるアウシュビッツやスターリンの粛清、反対の立場のキリスト教十字軍の虐殺にも言及し、「正義のための流血」を是認するこの「厄介な生き物」の二律背反、宗教的・道徳的たらんとして残酷にならざるをえない「人間の運命」を力説する。

次に「善には悪が必要である」。悪に対する寛容・非寛容に就いて熟考したベルジャエフの思想が考察され、対照的に渡部昇一の評言に見られる「人間に

ついで「無知」に根ざした「没道徳的白昼夢」が酷評される。森嶋通夫しかり、三好徹しかり、三島由紀夫も丸谷オーも長谷川三千子も同断である。なぜ我々は突きつめた極端な思考が不得手なのか。ドストエフスキーの様に「怯懦と怠惰を駆逐」する戦争の効用を説けず、ブレイクの様に「能動的な悪は受動的な善に優る」との「危険な真理」も語れず、ニイチェの様に「勇敢である事が善であり、弱さにもとづくものの一切が悪だ」と断定する事も、なぜ出来ないのか。それは永井荷風が見抜き嘆じた西洋の「熱情」が日本人に無いからである。アウグスティヌスの如く「謙虚たりえぬ事に激しく懊悩する」凄まじいプライド(傲慢)の欠如が原因なのだと評される。おのが高慢に苦しみ格闘し「懸命に隣人愛を説いたトルストイ」に関して同じく論じても、武者小路実篤の「植物的な」「無気力な綺麗事」とシェストフの「道徳に関する切実な問題」提起とでは、雲泥の差があるのである。

次いで「モラトリアム惚けの防衛論議」。内山秀夫、長谷川三千子、筑紫哲也、日高義樹、長谷川慶太郎、永井陽之助、片岡鉄哉、岡崎久彦。彼らの「現に今在るぐうたら」が論難され、E. M. シオラン、ドストエフスキー、ハンナ・アレント、オーウェルの知的誠実との対比が際立つ。それから「戦争、道徳、そして愛国心」の章。殺人に関して小室直樹とカミュとの、清水幾太郎とオーウェルとの決定的な道徳的相違が指摘され、大岡昇平の『俘虜記』の大嘘とオーウェルの体験記の誠実とが比較論究される。そして、オーウェルのナショナリズムと愛国心との定義と区別を紹介した後、松原氏はその明確な線引きの難しさを述べ、「人間である限り、党派心も愛国心もナショナリズムも、免れる事は出来ない」からそれを恥入る必要はないが、「それに気付かぬ事、それに溺れる事」は汚辱なのだと書いた。

最終章「『無魂洋才』の国」。ここで自己欺瞞の知的怠惰を追及されるのは、井沢弘、高坂正堯、勝田吉太郎、唐木順三、井上ひさし、粕谷一希、渡部昇一、森常治の面々である。その瘦せ我慢の欠如、不真面目、不潔な処世術が、乃木希典、森鷗外、福澤諭吉、岡田資中將の真摯とパスカル、ドストエフ

スキーの本気と対照的に論評される。だが、それら没道徳な駄文なぞ消し飛ばし程、松原氏の紹介する「ピアク島で戦死した無名の一将校」の文章は床しく胸を打ち、清澄な和魂に共鳴させる。この戦争論は、友人を斬る事から始まり知人を斬る事で終るが、どこか思想信条をめぐり友人・弟子とも絶交する吉田松陰の真摯な和魂をも連想させて、鮮烈かつ清浄な読後感を残す稀有な雄編である。現象としての戦争を題材とした人間の本質論、切ない日本対手強い西洋に関する心深い比較文化論、何よりも知識人軽侮を通して快刀乱麻を断つ、景仰の日本人論なのである。

精緻な一大述作の構成と概略をかいつままで述べただけだが、この戦争論に登場する偉大な作家・詩人は皆、生命を賭して自己の思想信条に忠実に生きようとした。一方、著者に斬られた学者・評論家・作家は、多かれ少なかれ外来の抽象観念を笠に着て「人間不在」「道義不在」の説教の害毒を世間に垂れ流し、裏腹に自らの生き方だけは棚に上げ、安閑と生計を立てて地位も名声も安泰である。牛は牛づれの気楽軽薄、雲煙過眼の読者の無知、無頓着もまた度し難いと著者は長大息する。全集第二巻に収められた二葉亭四迷や中野重治や高村光太郎に関する論考に於いて、著者がかつて確実に日本に存在したひたむきさに就いて詳述し、呆れ返るほど洋学かぶれの偽物がのさばる以前の、感動的なまで見事な和魂を称賛するのも当然である。とまれ、我が国の文人・学者のいい加減ぶりに愛想を尽かした松原氏は、ひたむきな真剣勝負の武人、(驚くべし、当時は世間から白眼視された)真摯なる自衛官と交際すべく、全国各地を飛び回る事になる。

たびたび松原氏と行動を共にした留守晴夫氏は、この全集第三巻の解説を、著者がかつて引用した森鷗外の以下の様な文章で結んだ。「要スルニ世間ハマダノンキナルガ如ク被存候。多少血ヲ流ス位ノ事ガアツテ始テマジメニナルカト被存候」。さて我が書評の読者は、この松原・留守両氏、鷗外の意見に与するか、それとも「マダノンキ」だから「多少血ヲ流ス位ノ事」に拒絶反応を示すか。世相の変化に関らず、感情的に賛成するにせよ反対するにせよ、何はさ

て置き、この文学的哲学的な異色の戦争論『松原正全集第三巻』をぜひ熟読玩味して頂きたい。西洋の鋭い批判精神と凄まじい破壊力の論理を、これほど真摯に活用できる著者の力業に是非とも驚嘆して頂きたい。「酸いも甘いも知らぬげに、いや酸い事ばかりは知らずして、すいすいと飛び」回る極楽とんぼの秋津島と、松原氏が苦々しげに評した三十五年前と、知的状況はほとんど変わらないからである。

解説結語の「血ヲ流ス」事にこじつけて、ここで過日私が読了した松原正訳『宝島』(平凡社世界名作全集20、昭和三十五年)の作者 R. L. スティーヴンソンに就いて少し書いておきたい。児童文学『宝島』の中にも、訳者の好む様な正義感、道義的決断に関する興味深い場面があり、そこで主人公の少年は決死の覚悟をして海賊との約束を守りぬかんと努めるのだが、それはともかく、チェスタトンによれば、この冒険好きの少年の様な作者は「おれたちが血を流すことなどないのか!」と、ロマンスを否定するヴィクトリア朝の偽善と妥協の生き方に対して、猛然と抗議の声を上げたのである。事実、肺病病みのスティーヴンソンは恐ろしくひたむきで勇猛果敢な男であり、従容として斬首の刑に臨んだトマス・モアと酷似した最期を遂げた吉田松陰(YOSHIDA-TORAJIRO)に就いて、深い感動を籠めて下田踏海の挙を語り、「その生命と力と暇のすべてを捧げたため、彼の祖国が今日この大きな恩恵を得たことを忘れてはならない」と称賛した。

また別の折、ハワイのモロカイ島に於いてハンセン病患者のために一生を捧げたカトリックの神父ダミアンが自らも罹患して死去した後、スティーヴンソンと同じ会衆派の有力牧師ハイド氏が、故人の死因を女性患者との性交渉による梅毒感染だと喧伝し、この聖者の顕賞に水を差した事に対し、ダミアンの生前に面会を熱望したが体調優れず断念をしたスティーヴンソンは、真実を知るため病をおして現地を訪れ、「汚れた」隔離地域に一週間滞在して熱心に聞き取り調査を敢行、その結果ダミアン神父への謂れなき中傷だと判明するや激怒した彼は、名誉棄損の裁判に負ければ無一文になる事も覚悟して抗議文「ハイ

ド氏への公開状」を一気に書き上げ公表し、「ハイド氏を完膚なきまでに論難した」のである。これを要するに、スティーヴンソンもまた、社交や処世術を無視し損得を度外視しても、真実と正義を追求し、尊い何ものかを守るためには、文字通り生命を賭して真剣勝負を挑む知的に誠実な作家なのである。

時にジョンソン博士の様な、時にスティーヴンソンの様な、松原正氏の真剣勝負のひたむきさを知れば知る程、その日本人離れした知力、体力、精神力の合一に驚かされ、著者が英国文化の精髓をやすやすと自家薬籠中の物とされたかの様な錯覚を覚える。けれども、氏自身は全集第一巻「この世が舞台」の中で中島敦の「悟浄出世」を取り上げ、日本人が「西洋を理解する難しさを十分に意識」する事がいかに大切かを、自戒の念を籠めて強調した。「西洋の名著から得た教養は『附焼刃』なのではないか」、「いそっぷの話に出て来るお洒落鴉」、様々な西洋作家の羽を挿して飾り立てる「醜怪な鳥」。本物を気取る偽物は、死に学問の自己満足の、無くもがなの文章を書き散らし稼ぎまくるより他ないか。

だが、肝心なのは偽物の自覚だと著者は論断する。「洋魂を理解出来ぬ事を大層気に病んだ」国木田独歩の様に、西洋の学問・思想の凄まじい真理の渴仰も探求も、結局我々の生き方とはなじまないと、その事実を「常に忘れない」様にしなければならぬと説く。或いはまた、偽物の自覚は本物の存在を意識させ本物に近づく不断の努力を要求しうるから、偽善は善に通じる、とも論じられる。晩年に右旋回して日本へと先祖返りする英文学者の列には決して立たず、夏目漱石にこそ学び、学べども学べども解らぬ西洋精神であるとしても、終生格闘し続け「死して後已む」べし、との高級な次元に於ける学問観なのであり、いかな未熟者の私とて衝撃を受けた。カール・レーヴィットの警拔な比喻を借りれば、二階に洋風の書齋、一階にかりそめにも和風の居間のある、久しく普請中の恐ろしく往き来しづらい生家にあるのだが、痩せ我慢をして不自由を気に病みつつ我が家を大切に、その様な気概ある一家の主の率直な言葉に直接ふれると、いくら鈍根な青二才でもさすがに感動した。この師こそ

「二本足の学者」であり、少しでも近づくために、高みを目指して一層精進しなければならぬ亀鑑であると痛感した。

けれども、感動した事にかけては、松原氏の紹介された濠北ピアク島で戦死した兵士の日記をやはり第一に挙げねばならない。全集第一巻の森鷗外「ぢいさんばあさん」の項や、『戦争は無くならない』の最終章『「無魂洋才」の国』の末尾に引用される日記の一節は、何度でも読み返したい雄々しい名文である。それは「自力でなさねばならず、また自力でなしうる事のみを、渾身の力を籠めてなし、南海の孤島に陣没した」陸軍中尉の見事としか評し様のない性根を端的に写し取り、読者に人間の幸福とは何かを沈思黙考せしめる。南洋のサモアで常住坐臥、死と直面しながら最期まで作品を書き続けたスティーヴンソンなら、この孤独な兵士の力強く健気な道義的行動の数々を、深い共感と敬意を籠めて一心に物語るに相違ない。無魂は論外だが、吉田松陰の場合の様に、和魂と洋魂との精華の間には、相互理解の可能な共通の徳目があるからである。

今後も圭書房から出る予定の『松原正全集』を広く江湖に推し、特に少壮気鋭の学者や研究を志す若い人々に読んでほしい理由は、約言すれば以下の通りである。読めば必ず知的な衝撃を受けて、以前の自分とは別の新たな自分になる筈だからである。「論語読みの論語知らず」なる俚諺がある。理屈は立派だが、口先だけで実行力の無い道学先生の事を意味する。しかし、さらに醜悪滑稽な、英語読みの英語・論語知らずなる偽物が多く存在する。西洋の学問知識はたんとあるが単に西洋文化にかぶれただけで、日本の文化には皆目関心が無く、父祖の徳義にもとる行動しかできぬ様では、元も子も無いのである。なるほど西洋の精神に学ぶ努力は地道に継続しなければならない。しかし、学ぶとは真似ぶ事であり、真似ようとして遂に真似られぬ西洋精神の苛烈を悟らねば意味が無い。のみならず、西洋と過去の日本とを直視して内省し、現在の日本に於ける等身大の自己との、双方向への隔たりを正確に測定する難事に挑まねばならない。つまり、彼我の文化の差ばかりでなく、日本の古往今来に存する

和魂と無魂との埋め難い溝も、その途方もなく大きな精神的距離も、常に意識しておく事が大事なのだと、これは松原氏が口を酸ばくして語られた苦い真実である。だが、英語の勉強の延長ついでに英文学を研究し、いくら二階で西洋学問に淫した所で、この苦い真実だけは得心はおろか想到する事すらできず、かくて博覧強記のスタイナーが一刀両断に斬り捨てた「荒涼たる灰色の沼地以外のなにものでもない」研究・論文が一丁上がり、陸続と仕上がる底無しの凋落へとつき進むしかないのである。

長らく地に足のつかぬ遅鈍な門人は「利いた風な事を書くな」、「いい気になるなよ」、「君はロレンスの（チェスタトンの）身内か」等々、幾度となく恩師から叱正を受けた。そして、全集の評言からも明々白々な如く巧妙かつ効果的なこと無類の、卑近な具体的事例を一々挙げられ、深刻めかした拙論の滑稽な誤りと上滑りを懇切丁寧に説明して頂いた。単刀直入に白状すれば、ボズウェルよろしく居た堪れないほど木端微塵に粉碎された。無論、師匠の講評を完全に理解できた訳ではない。だが、「山月記」の李徴ではないが、「臆病な自尊心」と知的な虚栄心とを肥大させた自業自得の私の様に、学者の抽象論や専門用語のでたらめに騙されないために、自らが言行不一致の厚かましい偽物とならないために、格物致知の真の学者たる松原正氏の著作こそは必読書の随一と確信し、ここに推奨して世の操觚者ならびに愛書家に、購読の喜悦に倍加する感奮興起を約束する次第である。

そして出来れば、アインシュタインとフロイトの往復書簡『ひとはなぜ戦争をするのか』（講談社学術文庫、平成二十八年）と併読して頂きたい。松原氏の思考の徹底と迫力とはは較ぶべくもないけれども、両天才の文章にはいくつか的確な知見も認められるのだが、他方、解説を書いた解剖学者の養老孟司と精神科医の斎藤環との評言は余りに太平楽過ぎる。これぞ「人間不在」、「道義不在」の戦争論の典型である。詳述はしないが、解説者の二人には、自分がアインシュタインの批判した「暗示にかかりやすい」知識人、つまり「現実を、生の現実を、自分の目と耳で」把握せず、「紙の上の文字、それを頼りに複雑

に練り上げられた現実を安直に」理解しようとする知識人の一人である自覚が全く無く、フロイトの評した「穏やかな生活を送る種族、強制や攻撃などとは縁のない種族」、即ち「私には信じられない」人間の一人であるとの痛感も皆無なのである。八十五年前の西洋の科学者の方が人間に就いて遥かに深い洞察を示した事実は、科学の進歩が人間を必ずしも賢明にせぬ事を、無魂洋才の悲惨を改めて露呈し、浅薄な文化観を得意気に開陳する現在の日本人科学者の存在は、養老孟司の結びの通人ぶりを皮肉るなら、性懲りも無く「ヒトは変わらず、社会も変らぬ」との仮想ならぬ厳しい現実を、腹立たしくも明証するものに他ならないのである。

大阪学院大学外国語学会会則

- 第1条 本会は大阪学院大学外国語学会と称する。
- 第2条 本会の事務所は大阪学院大学図書館内におく。
- 第3条 本会は本学の設立の趣旨にもとづいて、外国語学、外国文学の研究を通じて学界の発展に寄与することを目的とする。
- 第4条 本会は次の事業を行う。
1. 機関誌「大阪学院大学外国語論集」の発行
 2. 研究会、講演会および討論会の開催
 3. その他本会の目的を達成するために必要な事業
- 第5条 本会の会員は次の通りとする。
1. 大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部の専任教員で外国語学、外国文学を専攻し担当する者
 2. 本会の趣旨に賛同し、役員会の承認を得た者
- 第6条 会員は本会の機関誌その他の刊行物の配布を受けることができる。
- 第7条 本会には次の役員をおく。任期は2年とし、再選は2期までとする。
1. 会 長 1名
 2. 副 会 長 1名
 3. 庶務・編集委員 4名
- 第8条 会長は会員の中から選出し、総長が委嘱する。
副会長は会長が会員の中から委嘱する。
委員は会員の互選にもとづいて会長が委嘱する。
- 第9条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
副会長は会長を補佐する。役員は役員会を構成し、本会の企画・運営にあたる。
- 第10条 会長は役員会を招集して、その議長となる。
- 第11条 会長は会務執行に必要なとき、会員の中から実行委員を委嘱するこ

とがある。

第12条 総会は年1回これを開く。ただし、必要あるときは会長が臨時に招集することができる。

第13条 本会の経費は大阪学院大学からの交付金のほかに、有志からの寄付金その他の収入をもってあてる。

第14条 各学会の相互の連絡調整をはかるため「大阪学院大学学会連合」をおく。

本連合に関する規程は別に定める。

第15条 会計は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第16条 本会会則の改正は総会の議を経て総長の承認をうるものとする。

附 則

1. この会則は、昭和49年10月1日から施行する。
2. この会則は、平成3年4月1日から改正し施行する。
3. この会則は、平成13年4月1日から改正し施行する。
4. この会則は、平成24年4月1日から改正し施行する。
5. この会則は、平成25年4月1日から改正し施行する。

以上

大阪学院大学外国語論集投稿規程

1. 投稿論文（翻訳を含む）は外国語学、外国文学に関するもので未発表のものであること。
2. 投稿資格
 - イ. 投稿者は、原則として本会の会員に限る。
 - ロ. 会員外の投稿は役員会の承認を必要とする。
3. 原稿は次のように区分し、その順序にしたがって編集する。論説、研究ノート、翻訳、書評など。
4. 原稿用紙は、本学の200字詰用紙を横書きにし、枚数は原則として80枚を限度とする。

ワードプロセッサ使用の場合は、A4判用紙を使用し、1ページを35字×27行とし、16枚程度までとする。

外国語文の場合はA4判用紙を使用し、5,000語程度までとする。

論文本文が日本語文の場合は300語以内の外国語文の、また本文が外国語文の場合は900字以内の日本語文の、概要を付ける。

外国語による論文および概要は、投稿前に当該外国語母語話者によるチェックを受けることが望ましい。
5. 発行は原則として、前期・後期の2回とし、6月・12月とする。年間ページ数は300ページ以内とする。
6. 抜刷は40部を無料進呈し、40部を超過希望の場合は編集委員会で超過費用を決定する。
7. 投稿され掲載された成果物の著作権は、著作者が保持する。

なお、出版権、頒布権については大学が保持するため、論文転載を希望する場合は、学会宛に転載許可願を提出願うこととする。
8. 投稿された論文の著作者は、当該論文を電子化により公開することについて、複製権および公衆送信権を大学に許諾したものとみなす。大学が、複製権および公衆送信権を第三者に委託した場合も同様とする。

この規程は、平成25年4月1日から適用する。

以 上

大阪学院大学外国語論集執筆要領

1. 原稿は最終的な正本とする。校正の段階でページ替えとなる加筆をしない。
2. 欧文は1行あきにタイプすること。
3. 邦文原稿の挿入欧文は、タイプもしくは活字体で明瞭に書くこと。
4. できるだけ現代かなづかいと当用漢字を用い、難字使用の時は欄外に大書する。
5. 印刷字体やその他印刷上のスタイルについては、編集委員に一任する。
6. 注はまとめて本文の末尾に置くこと。

インデックス番号は上つきとして通しナンバーとする。その他の書式については、会員が所属する学外の学会の規程に準ずるものとする。(例えば、英文原稿の場合は、*MLA Hand book for Writers of Research Papers* に準拠すること。)
7. 図や表の必要の場合は別紙に書いて1枚ごとに番号と執筆者名を記入し、本文中の挿入箇所を指示すること。説明文は別紙にまとめる。
8. 自分でスミ入れして完成させた原図や写真の場合は厚手の台紙にはりつけて、希望の縮尺を記入すること。
9. 執筆者校正は3校までとし朱筆のこと。3校以前で校了してもよい。
10. 次の場合は、必要経費の一部が執筆者負担となることがあるのでとくに注意されたい。
 - ア. 校正のさい、内容に大きな変更は認められないが、やむをえず行って組換料が生じたとき。
 - イ. 特殊な印刷などによって通常の印刷費をひどく上まわる場合。
11. 原稿の提出期限は原則として9月末と3月末とする。
12. 原稿の提出先は編集委員あるいは図書館とする。
13. 原稿提出票を必ず添付する。原稿用紙と提出票は図書館事務室に申し入れる。

以上

執筆者紹介（掲載順）

黒 宮 公 彦 情報学部 准教授

多 賀 敏 行 外国語学部 教授

平 松 良 康 商学部 教授

編集後記

地球規模商業主義論理に貫かれた今の世界で「軍産官学連携」が進展しつつあると、物理学者の池内了氏は警鐘を鳴らしている。『科学者と戦争』岩波書店2016) その趨勢の中で求められるのは「役に立つ」研究、所謂“理系”の研究である。そしてそれは莫大な資金を必要とするのが常だ。では、我らが学会の会員が携わる分野の研究は、金もかからぬ代わりに役にも立たぬものなのだろうか。池内氏はさらに指摘する。そうした科学者たちは、「デュアルユース」などの理屈に依拠して資金の出処に目をつぶってしまったたり、また自分の研究に没頭するあまりにその意味や最終的結果に想像力を巡らせることを忘れてしまったたりして、正義や倫理を見失うこともある、と。こころにこそ、言語や文学の研究者たちが「役に立てる」場がありそうだ。何故なら、言語や文学を研究することは、人間の在りようであるべき姿と想像力を致すことであるからだ。無論、この分野においても専門細分化は著しく、研究者が重箱の隅をほじくりに没頭しているような場合もある。ある意味でマイノリティである私たちが、自らのしていることを客観視すること怠らず、サイレント・マジョリティに墮することなく、研究—そして我らが論集にどしどし投稿—してゆきたいものである。

(M. N.)

大阪学院大学外国語学会役員

会 長 長岡みゆき

副 会 長 黒宮 公彦

編集・庶務委員 笹間史子・永岡規伊子・山口 修・吉村京子

大阪学院大学外国語論集 第72号

平成28年12月20日 印刷 編集発行所 大阪学院大学外国語学会

平成28年12月30日 発行 〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号

電話 (06) 6381-8434 (代)

発行人 長岡みゆき

印刷所 大枝印刷株式会社

吹田市元町28番7号

電話 (06) 6381-3395 (代)

OSAKA GAKUIN UNIVERSITY

FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES

No. 72

On *suddenly*: Part 1 Kimihiko Kuromiya 1

Research Notes

The Tragedy of Mistranslations of the Japanese Diplomatic
Cables—On the Eve of the War between Japan and the U.S.
1941 Toshiyuki Taga 19

Book Review

Matsubara Tadashi, *The Collected Works of Tadashi
Matsubara, Vol.3: Wars Will Always Break Out*, ed., Haruo
Rusu, et al. Kazuyasu Hiramatsu 31

December 2016

THE FOREIGN LANGUAGE SOCIETY
OSAKA GAKUIN UNIVERSITY